

ASEV JAPAN を考える

ASEV JAPAN 元会長

大塚 謙 一

ASVE JAPAN が発足してから、すでに5年を経過しました。この間、会員の諸兄姉の協力により、また横塚エクゼクテブ・ディレクターの御盡力により、現在のように活発なChapterになったことは御同慶の到りです。

親学会の ASEV は、今や世界のワイン学における重要な学会であり、その支部である ASEV JAPAN は、研究会とか集談会というものとは一線を画する学術的組織であります。しかし、ワインという直接一般消費者の身近にある商品が対象でありますから、このような学術的団体には、社会の各方面の方々协会会员あるいは会友となっておられる所に、他の学術学会とは違った特徴があると思います。このことは、この学会がアカデミックな研究だけに偏らずに、品質管理とか商品学さらにはワインと人間との係り合いといった課題にも関係する理由となりましょう。

さて、ASEV JAPAN 設立の頃、アメリカの学会の支部を何故日本におく必要があるのかということが議論されました。恐らく、現在でもこの疑問をお持ちの方もおられることでしょう。以下、私なりに考えていましたことを示して御参考に供したいと思います。

日本のワイン業界の規模が小さく、その研究技術者の数が少ない事もあって、折角の優れた研究成果も発表する場に限りがあること、特に国際的な舞台での発表は至難である事、国際的な場といっても、O I V の総会、特定テーマのシンポジウム、記念講演会等が殆どで、一般講演をあつかう学会的なものは ASEV が唯一といえるものである事。また ASEV はアメリカの学会ではあるが、国際的会員組織である事などが考えられました。

このような国際的学会の支部を日本に設置することは、日本のワイン研究者、栽培研究者が一堂に会して討議できる場が出来、しかもそれが直接国際的な関係を持つことになり、上述の事情を殆ど受容できるものといえます。しかも、日本に支部を置くのは、アメリカ東部支部に次いで2番目か3番目かという破格の措置であったそうです（シングルトン教授の強い御支持のお蔭とも聞いています）。以上のような事情に基づいて、支部設立に賛成したわけです。

甚だ、理路不整然に書きましたが、今後とも ASEV JAPAN が発展することを祈ります。

(1990年5月29日)